

# 18世紀フランスにおける「社会」の主題化とホッブズ

首都大学東京客員研究員 高橋章子

## 1. 目的・対象・方法

近年、「社会」概念は危機に瀕しているという議論や、社会学理論は「社会」概念を放棄すべきだという議論、また逆に、「社会」概念を擁護する議論などが数多く提出されている。社会学が長らく、対象を分析ための資源として用いてきた「社会」概念が、逆に主題化され、これ自体がさまざまな角度から検討の対象となっていると言えるだろう。こうした中で、「社会」概念を批判するにしろ擁護するにしろ、「社会」が歴史的にどのような概念であったのかを検証ことには意義がある。「社会」概念はラテン語の *societas* にまで遡る長い歴史を持っており、その全体像が明らかにされる必要があるが、本報告では、18世紀フランスの特にジャン＝ジャック・ルソーと百科全書派の「社会」概念と彼らによるホッブズの解釈・批判を中心に取り上げる。

この時期のフランスを対象とする理由は、「社会」(*société*)という語はそれ以前にも知られてはいたが、「社会」(*société*) および「社会的な」(*le social*)という語がフランスで広範に広まった事が顕著に見てとれるのが18世紀のルソーの頃以降だからであり、この時期に重要な語として主題化されたからだ。また、フランスは社会学誕生に縁の深い地であり、フランスで「社会」概念が広範に流布し主題化されたときに、この概念がどのような意味だったかを明らかにすることには、今日の社会学における「社会」概念の意味との比較が可能になるという点でも意義がある。方法としては、出来る限り概念の共通性と差異を明確にするために、対象となる人物の使用している語の意味と使用法、およびその時代の一般的なその語の使用法に留意し、「社会」がどのような概念と結び付けられ、どのような文脈で使用されているかを分析する。

## 2. 結論

上述の考察を通して次のことが明らかになる。ホッブズがフランスで紹介・解釈・批判された内容を検討すると、そこには「社会」概念にとって重大なモメントがあったことが分かる。ホッブズ自身の議論では、*society* という語は稀に用いられるが、主権の譲渡によって形成される秩序は一貫して *common-wealth* という概念で表現されており、*society* の語では表現されない。ホッブズの議論では *society* と *common-wealth* は互換的に用いられているわけではなかった。だが、ディドロは百科全書での「ホッブズ哲学」の項で、*common-wealth* を *société* と訳しており、ルソーも同様に解釈している。これによってホッブズの *common-wealth/society* の区別は消失する。その上で、ルソーと百科全書派は、両者には差があるにしても、いずれもホッブズの「社会」(*common-wealth*) に対して、そのような人為的に形成された「社会」を最善の解決とみるのではなく、人間本性にとってより普遍的で、より根本的な、同時に善であるような「社会」があるはずだ(あるべきだ)という考えを提示する。このことから、18世紀フランスで、百科全書派やルソーによって主題化された「社会」概念は、ホッブズの秩序への批判を通して、ホッブズが捉えた秩序とは別の要素を重視するものとして形成された側面があることが分かる。

文献 : Hobbes, T., [1651]2006, *Leviathan*, New York: Dover publications, inc.

Diderot and d'Alembert(ed), *L'Encyclopédie, ou Dictionnaire raisonné des sciences, des arts et des métiers, par une société de gens de lettres*, [1751-1780]1969, NEW YORK : READIX MICROPRINT CORP.

Rousseau, J.-J., [1755]1996, *Discours sur l'origine et les fondements de l'inégalité parmi les hommes*, Paris: Librairie Générale Française.